



『祭りの場』

林 京子

林京子は長崎市に生まれ、十四歳まで上海で過ごした。県立長崎高等女学校在学中、学徒動員先の三菱長崎兵器製作所大橋工場で被爆した。

昭和五十年、被爆三十年後に書いた『祭りの場』で第七十三回芥川賞を受賞した。

『祭りの場』は、自身の被爆体験をもとに、科学的データを引用した客観的な硬筆の文体で、戦時下に生きた長崎の若者たちの姿を描いている。

ありがとう―出陣学徒が敬礼する。

また逢おう―送る学徒が礼を返す。粗末な、心のかよう青春の哀悼の祭りである。

最後にみた送別の踊りの輪は、送る者送られる者、みんな死んだ。

長崎大学文教キャンパスに隣接する三菱重工の敷地には「原爆供養塔」が建立され、被爆で命を落とした県立高女の教師と女学生たちの名も刻まれている。